

PASSION

VOL.37
November.2015

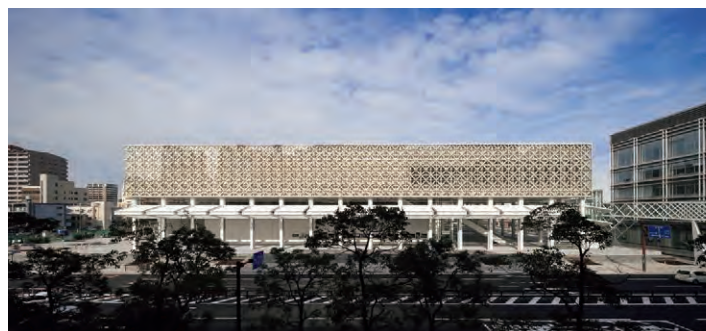
パッション 第37号
発行元:金剛株式会社
平成27年11月発行



図書館

巻頭特集

©Hiroyuki Hirai



地域を好きになる「出会い」を演出
大分県立美術館



一関市立一関図書館



和歌山大学附属図書館



恩納村文化情報センター



東北大学附属図書館



さかい利晶の杜



弘前大学附属図書館



神奈川学園中学校・高等学校



つなぎ美術館

美術館
文化観光施設

知を守り、地を育む

巻頭言

本誌 PASSION は、お客様とお客様を「つなぐ」情報誌です。移動棚をはじめとした収蔵設備の納入を通じて私たちがお客様からいただいたご縁を、他のお客様にもつないでいきたい。そんな思いを乗せて、全国の図書館・文化施設の取り組みを金剛の納入先に限らず広くご紹介しております。

今回発刊させていただく Vol.37 のテーマは「知を守り、地を育む」。

ICOMOS（国際記念物遺跡会議）が1964年に採択した「ヴェニス憲章」には、史跡の「現地保存の原則」が提唱されています。もともとは保存科学の観点から提唱された原則ですが、「文化の価値はその地域の気候風土や人々の営みとともにある。ゆえに、資料と地域のためにも現地で保存するのが望ましい」といった文脈を論ずる際に使われることが多くあります。このことは、史跡や資料といった有形のもののみならず、地域の慣習や風習、方言、民話などといった無形のものを含めた文化全般に当てはまります。

地域の人々によって生み出された有形無形の文化は次の世代を育み、引き継がれながら新たな文化の創出が繰り返されます。その陰には、文化が生まれた「現地」で地域の文化に寄り添い、「収集」「整理」「保存」「公開」といった日々の業務に勤しんでいる方々の営みがあります。

今回の PASSION では全記事を通じて、美術館、図書館、文化観光施設が地域の中で果たす役割について探らせていただきました。取材させていただいた方々の誇りと思いが、記事を通じて本誌を手に取っていただいた皆様につながれば何よりです。

安心と先進で社会文化に貢献する

金剛は永年蓄積してきた保管の技術と先進の知恵で、人と文化を応援します

このたびは本誌をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

平成 27 年 11 月
金剛株式会社 社長室



01

INTERVIEW

巻頭特集

大分県立美術館

地域を好きになる

「出会い」を演出



話し手

加藤 康彦

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団
大分県立美術館 副館長兼学芸普及課長

岡 しげみ

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団
大分県立美術館 学芸企画グループリーダー

聞き手

原田 亜美

金剛株式会社 社長室



大分県立美術館 外観 ©Hiroyuki Hirai

1F アトリウム ©Hiroyuki Hirai



2F カフェ ©Hiroyuki Hirai



大分市の中心部に2015年4月、県立美術館が新たにオープンしました。運営の特長や、市街地の美術館としての地域との関わり方について伺います。

—美術館の概要と特長について教えてください。

ガラス張りで開放感がある建築が一番の特長といえます。館内1Fと3Fに展示室、2Fに教育普及コーナーおよびカフェがあります。1Fの展示室は可動壁によって作られるため、柔軟に動かすことができるのもまた特長です。1Fのアト

リウムやその中のモバイルカフェ、2F全般、3F屋外展示など、美術展を見ない人でも入ることができるフリーゾーンが多くあります。そこにも作品を置くことで、訪れた人が気軽にアートと触れ合えるようにしています。また、2FのペDESTリアンデッキを通じて、以前から道向かいにあったiichiko総合文化センター※1と直接行き来できます。

—どのようなコンセプトの美術館なのですか。

まずは「美術館の敷居を低くする」とい

うコンセプトがあります。それを受けて、このように開放感のある設計になりました。

また、「出会い」と「五感」というコンセプトも重視しています。当館で開催する自主企画の展覧会においても、作品と作品、作品と観客が出会うこと、そし



「モダン百花繚乱『大分世界美術館』」展の様子(左・右)

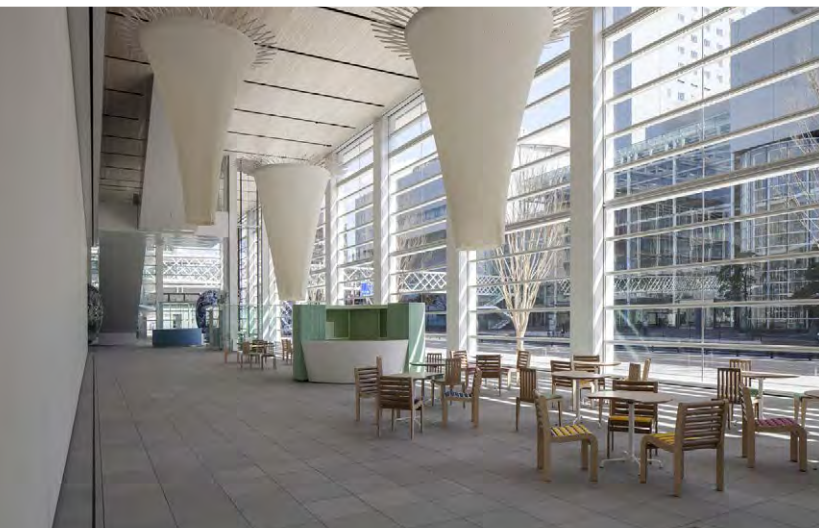


2F 教育普及ゾーン ©Hiroyuki Hirai



ペDESTリアンデッキ ©Hiroyuki Hirai

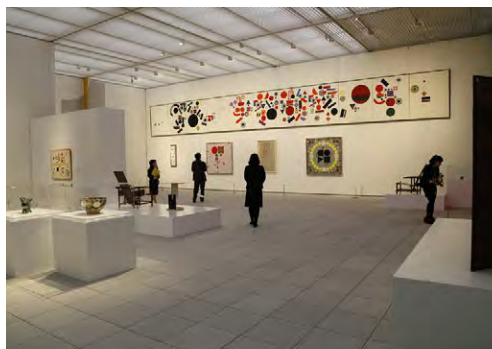
※1 あらゆる舞台芸術に対応できる大ホール「iichikoグランシアタ(1,966席)」と、音響を重視した中ホール「iichiko音の泉 ホール(710席)」をはじめ、ギャラリー、練習室、会議室等を備えた総合文化施設。1998年9月開館。



てこれまでは見るだけだった展覧会を五感すべてで体験してもらえるものを目指すことを目指し、館長の新見自ら企画を練っています。開館記念展の「モダン百花繚乱『大分世界美術館』」も自主企画でしたが、絵画だけ、陶器だけというよ

うなゾーンは作らず、絵画と陶器、絵画と衣服など、ジャンルを超えたものを一緒に展示し、通常の展覧会ではあまり例のない構成にしました。作家や絵画技法に関する勉強ばかりの展覧会ではなく、もっと自由な感性で鑑賞してもらい、見た人が各々の物語を描いてくれるような美術展を理想としています。これは「美術館の敷居を低くする」ことにもつながる部分だと考えています。来年の春には、展示室でパフォーマンスや詩の朗読などを行う「シアター・イン・ミュージアム」という企画も考えています。さらには当館の教育普及活動としても、五感を使っ

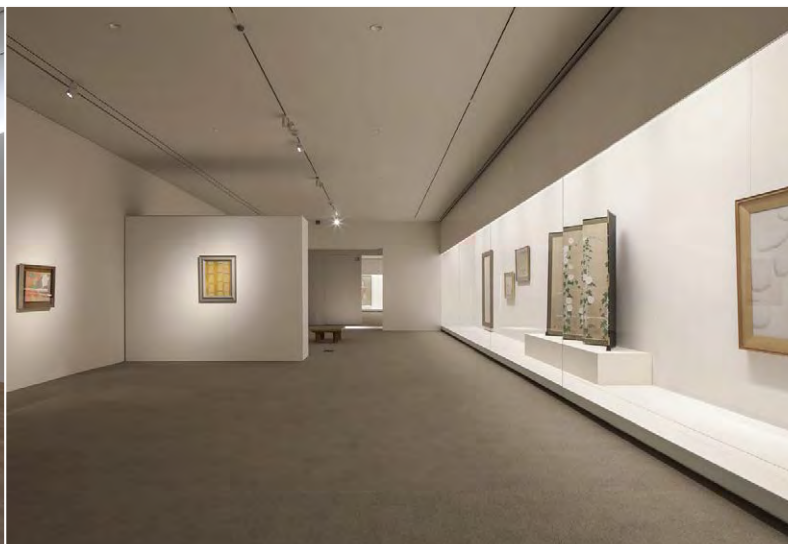
たワークショップを行っています。美術館という場に来るとどうしても構えてしまったり鑑賞を楽しめないという方も、このワークショップによって五感をウォーミングアップしてもらい、素の自分になって鑑賞してもらいたいと思います。子ども



ワークショップ「布と戯れる」の様子



3F コレクション展示室(洋画) ©Hiroyuki Hirai



3F コレクション展示室(南画) ©Hiroyuki Hirai

もたちよりも大人の方々のほうが、夢中になってワークショップに取り組みられていますよ。

それに加え当館は、「大分にしかない美術館」というコンセプトも掲げています。大分の美術を守ることが当館最大の使命ですが、美術そのものだけではなく、それを育んできた大分の自然や風土も伝え、活かしていかなければならないと考えています。そのため建物に用いる木材なども、大分県産のものを使用しました。さらに、先ほど申し上げたワークショップの中で、大分の石や土を砕いて顔料にしたり、竹や七島イ(蘭)^{しつとうい}※2という県産材を使うなどして地域に根差した活動を展開しています。



七島イ(しつとうい)を使って作られた椅子も館内に設置されている

価値を根拠に集めたものではなく、大分にゆかりのある作家のものにこだわっています。自分たちの先達がつけてきたものが誇れるものであることや、有名な作品や作家だけが美術ではないということを、当館を通して大分の人に知っていただきたいと考えています。

地方創生などもうたわれている昨今ですが、まずはとりわけ子どもたちに自分の住む地域を知ってもらい、好きになってもらうことが地域にとって何より必要ではないかと思しますので、当館も大分の文化・風土を語ることができる人材育成の一助になればと願っています。

展示室を実際に使うのは当然初めてという状態でしたので、搬入や施工の作業中に足りないものが見えてきたりする苦労がありましたね。

そして当館はガラス張りの建物ですから、外からでも館内にどれだけ人があるのかよく見えます。つまり館内に人がいないと、外から見たときに「今はなにも開催されていないのかな」と思われてしまう恐れがあるのです。そうならないように、常に多くの人に来てもらえる企画を考え続けることが、今後の課題といえると思います。

また、開館初年度ということもあって今は多くの方に来ていただいています。今後はさらにリピーターになっていただけるような美術館になる必要があります。現在は利用者アンケートを積極的に取っているところです。当館は「県民とともにつくる美術館」になることも目指していますので、県民のみなさんの意見をいただきながら、フレキシブルに運営を変化させていきたいと思っています。

—今後の展望について教えてください。

iichiko 総合文化センターと共同でイベントを行うなどして、この一帯を芸術・文化の拠点としていきたいですね。そして「常に何か開催している」と思われるような存在になり、人々が街を歩く中でいつでも気軽に立ち寄ることができる、街のオアシスのような存在として機能してほしいと思っています。そのようにして当館に来ていただいた方々が憩ったり、企画展を鑑賞したりする中で、アートと触れ合いふるさつを知る「出会い」を演出していく美術館になりたいです。

—大分という地域を非常に大事にされているんですね。

はい。そもそも美術やアーティストは単独で存在するわけではなく、それを取り巻く環境や時代が生み出すものです。その意味で地域というものは最も重要と考えています。

当館の収蔵品も、有名度や美術史的

—開館から約5か月運営されてみて大変だった点や、見えてきた今後の課題などありますか。

やはり新しい建物に慣れるまでは大変でした。とくに、オープンと同時に大型展となる「モダン百花繚乱『大分世界美術館』」を開催したときは私たち美術館の職員自身が建物に慣れておらず、

※2 七島イ(しつとうい)…大分県の国東地方だけで生産されているカヤツリグサ科という植物で、畳の材料となります。似ているもので「い草」がありますが、い草の断面は丸いのに対し、七島イは三角の形をしています。(七島イ振興会 ホームページより)



地域の資源を使った絵の具づくりのワークショップも開催している

一地域の美術だけでなく風土や自然まで大事にされているという貴館の施設や取り組みについて、非常に興味深く聞かせて頂きました。本日はありがとうございました。

取材日：2015年9月4日



©Hiroyuki Hirai

DATA 大分県立美術館

所在地	〒870-0036 大分市寿町2-1
TEL	097-533-4500
開館時間	月～木・日曜日 / 10:00 - 19:00 (入館は18:30まで) 金・土曜日 / 20:00まで (入館は19:30まで)
休館日	原則無休 (館内点検等による臨時休館を除く)
URL	http://www.opam.jp



02

INTERVIEW

一関市立一関図書館

市民参加の手作り図書館

話し手



小野寺 篤 | 一関市立一関図書館 館長



飯村 昌弘 | 一関市立一関図書館 企画管理係 係長

聞き手

矢賀部 仁 | 金剛株式会社 社長室





図書館前に設置された大槻文彦像(上)と図書館の理念を刻んだ石碑(下)



—昨年(平成26年)7月に新館をオープンされました。最初に新館の基本理念についてお聞かせいただけますか？

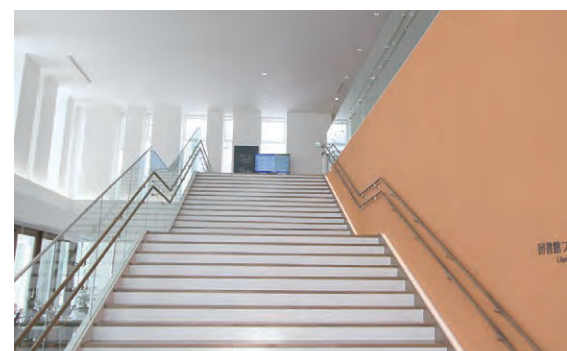
新図書館の基本理念は「でかけよう ことばの海へ 知の森へ」です。これは一関ゆかりの国文学者 大槻文彦が編纂した、わが国初の近代的国語辞典『言海』に由来するものです。図書館を一関市民の学びを支える施設に、という思いが込められています。図書館前にある大槻文彦の胸像はもともと市役所にあったものでしたが、図書館の新築にあわせてこちらに移設し、傍らには理念を刻んだ石碑を設置しました。開館後はこの理念に沿って「辞書を編む」と題した記念事業を開催しました。小学校3～6年生を対象とした辞書作りの体験会で、講師は『大辞林』を出版されている三省堂の辞書出版部の方に務めていただきました。子供たちの身の回りにある言葉を自分自身の言葉で説明して辞書にまとめるという、

かなり難易度の高い試みでしたが、子供たちはやりがいを感じてくれたようです。大槻文彦が残してくれたDNAを将来の一関につなげていく試みとして今後も継続していきたいと思っております。

—図書館建設にあたって工夫された点など教えてください。

市民の皆さんと一緒に、一関にとってどのような図書館が必要かということを全く白紙の段階から考えました。活動の中心となったのは“新一関図書館整備計画委員会”です。委員会の委員長には世嬉せきの一酒造いちの佐藤社長に引き受けていただきました。世嬉の一酒造は江戸時代から続く一関の蔵元で、佐藤社長は「酒の民俗文化博物館」や「いちのせき文学の蔵」を運営するなど、地域の文化伝承に対して非常に深い理解をお持ちの方です。新図書館の計画にあたって図書館としての機能はもちろんのこと、文化的な

側面からもどのような図書館が必要かを一緒になって考えていただきました。立地についても当初は市役所の近くの敷地も候補地として挙がっていましたが、議論を重ねる中で今の場所になりました。市役所近くの候補地は広さの面では申し分なかったのですが、駅から遠いという難点がありました。新しい図書館は市民の学びを支える施設ですので、車を持たない高齢者の方や高校生も利用しやすいようにと、最終的に駅から徒歩5分という今の場所を選択しました。敷地が狭い分、一階部分は駐車場、図書館は二～三階という構造になりました。もちろんエレベーターも



2階の図書館フロアに繋がる大階段



完備していますし、一階からアクセスしやすいように階段も広く確保しました。使いやすさの面で平屋建て構造に対しての根強い意見もあったのですが、議論を重ねるうちに歩み寄りができて、みんなが納得する形になったと思います。何より整備計画委員会の活動を通じて市民と図書館の信頼関係を築くことができたのは大きかったですね。委員会の皆さんには開館後も応援団になっていただくなど、図書館の活動を支援していただいています。

— 市民の方々の理解も深く、うまく連携をとっていらっしゃいますね。

一関在住の作家 及川和男さんには図書館の名誉館長を引き受けていただきました。市内各地での講演活動のほか「エッセイの書き方講座」や、お薦め本を紹介しあう「私の一冊」といった講座を開催していただいています。及川名誉館長もまた一関の歴史や文化

に理解が深い方で、単に図書館を紹介するにとどまらない活動をしていただいています。たとえば、地元の専修学校に入学してきた新入生には図書館のほか、世嬉の一酒造の「いちのせき文学の蔵」をあわせて紹介していただいたりもしました。公設、私設の別を問わず、一関の文化を多面的に捉えられるように、積極的に活動していただいています。

— FaceBook でもイベントの様子を積極的に配信していらっしゃいますね。

イベントは図書館主催のもののほか、市民の方が主催されるものも多数あります。読書推進や文化創造といった図書館としての基本的な意義に沿うものという条件はありますが、イベントをきっかけに図書館を利用するようになっていただければと思っていますので、なるべく受け入れるようにしています。その他、学校や幼稚園、保育園からの

見学にも積極的に応じています。お子さん達自身の図書館利用を通じて親御さんたちにも図書館を身近なものに感じていただけるようになればありがたいですね。

子供さんたち向けの読み聞かせ会は定期的に開催しています。毎週土曜日には「図書館サポーター」という市民ボランティアの方々にも読み聞かせを担当していただいています。『図書館サポーター養成講座』も開催していて、受講していただいた方の中にはサポーターとして購入図書へのラベル装備作業などをお手伝いしている方もいます。仕事を引退された高齢者の方を中心に、ご自分の都合のつく時間帯に図書館に来ていただくゆるやかなボランティアです。

さらに平成27年度からはブックスタートにも取り組んでいきます。一関でも少子化が進んでいますので、健康づくり課の支援を受けて実施できることになりました。



グループスペースは、小学生の調べ学習などに、クラス単位で利用されている



高さは低く抑え、通路を広く確保した開架書架

一世代を超えた市民交流の場として図書館がますます機能していきますね。

建設段階から高齢者や子供さんでも安心して利用できるようにする狙いはありました。書架の高さは低く抑えて、通路幅も広く確保しています。児童コーナーもゆったりと広く、一階にはカフェも併設していますので、親子連れの方でも気軽に立ち寄っていただくことができます。

一市民の皆さんも図書館に対する見方が変わったのではないのでしょうか。

旧館の時には一日の利用者数は300人ぐらいでしたが、新館が開館してか

らは平均1,000人ほどで推移していますが、リピーターの方の割合も増えていますが、利用者カードの新規登録数が増えているのは嬉しいですね。一関には本館を含めて計8つの図書館があるのですが、8館全体で見ても利用者数は伸びています。新館ができたことで図書資料も充実してきていますし、市民の意識の中でも図書館を見直すきっかけになったようです。

一今後がとても楽しみです。本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

取材日：2015年2月10日



広さもコレクションも充実の児童コーナー



開放的な雰囲気のカフェコーナー



DATA 一関市立一関図書館

所在地	岩手県一関市大手町 2-46
TEL	0191-21-2147
開館時間	平日：午前10時から午後8時、土・日・休日：午前10時から午後7時
休館日	月曜日(休日の場合は翌日以降の休日でない日)、毎月第4木曜日(図書整理)、年末年始(12月29日から1月3日まで)(詳しくはホームページにてご確認ください)
URL	http://www.library.city.ichinoseki.iwate.jp/



03

INTERVIEW

恩納村文化情報センター

地域に密着し、「ここにしかない情報」を提供する

話し手

呉屋 美奈子 | 恩納村教育委員会 社会教育課
恩納村文化情報センター 主任



聞き手

原田 亜美 | 金剛株式会社 社長室

2015年4月、沖縄県国頭郡恩納村に、村内初の図書館機能を持つ施設・恩納村文化情報センターがオープンしました。1Fが観光情報フロア、2Fは村民から長年要望が出ていた図書情報フロア（図書館機能）という複合施設になっている同センター。その取り組みと現状について、呉屋様に伺います。

—オープンして5か月ほど経ちましたが、利用状況はいかがですか。

予想を大きく上回る盛況です。開館から4カ月経った8月末の累計で、入館者数は33,902人、図書貸出冊数は29,043冊となりました。蔵書数が3万冊程度であることを考えると貸出数も非常





恩納村文化情報センター 館内



恩納村文化情報センター 外観

に多いですね。村民の利用登録者は1,500人を越え、村外の登録者も1,000人の大台に乗りそうです。全体で村の人口の2割強となる見込みです。オープンして間もない施設ですので、まずは多くの人に足をはこんでもらって親しみを持っていただくことを当面の目標としていましたが、早くも達成できそうな状況になっています。

このように順調に利用していただけているのは、読書に対する需要がもともと村民にあったことにくわえ、オープン以来のイベント開催などの取り組みが奏功しているのではないかと思います。

— どういった取り組みをされてきたのですか。具体的な例を教えてください。 —

まずはイベント類ですね。オープンして間もない5月に、話題の作家・又吉直樹さんを招いて講演会を行ったことは非常に大きなインパクトとなったようです。作品「火花」を発表する前にアポイントが取れていたのが幸いでした。

その後は地元の資源を活用しながら、近隣の施設とも適宜連動したイベントを開催しています。7月には村内にある沖縄科学技術大学院大学の先生に講師として来ていただき、当館の屋上を開放し



講演後の7月に、又吉氏は「火花」で芥川賞を受賞し、さらに注目を浴びることとなった

て天体観測を行いました。

また、村で毎年行われる「うんなまつり」という祭りの期間には「日本の文化を再発見～浴衣で読書しませんか?～」というイベントを開催し、おりがみ教室やうちわづくり教室を行いました。利用者の方に浴衣で来館してもらったり、職員も自前の浴衣を着用したりして盛り上げました。

さらに8月に行った「サンセットウィー



「日本の文化を再発見～浴衣で読書しませんか?～」開催時(左・右)

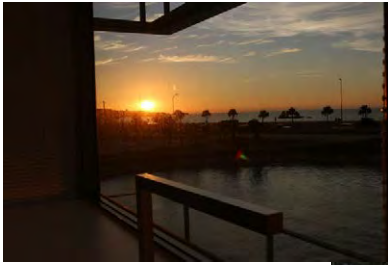


おはなしのへやは恩納村の海をイメージした内装になっている

ク」は、当センター周辺の一帯が夕日の名所でもあることに着目した企画です。当センターの閉館時間を「夕日が沈むまで」とし、利用者の方に日の入りを見ながら過ごしてもらうというもの。この期間は隣接する博物館も閉館時間を調整したり、企画展示を行ったりして連携しました。

現在は、「グリーンフラッシュの見える恩納村」という企画を開催しています。





「サンセットウィーク」の様子



グリーンフラッシュは、夕日が沈むときに緑色に見える自然現象です。ハワイやグアムではこのグリーンフラッシュが見られることを大々的にPRしているところもあり、実際にこれを目当てに現地へ行く観光客もいるそうですが、実は恩納村でも目にできる現象なのです。そこでこれをあらためてPRしようと、グリーンフラッシュの目撃情報を募集し、マップを掲示する取り組みを始めました。



グリーンフラッシュの見える恩納村

このように、いま地元にある資源を最大限活用して発信できるよう、色々と工夫を凝らしながらイベントを企画しています。

また、村の観光支援を目的とした取り組みもしています。恩納村にはリゾートホテルが多くあるのですが、そのうちANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾートとカファーリゾートフチャク COND・ホテルの2か所に当センターの所蔵本を置き、ホテルの宿泊客の方々に貸出しています。ホテル内でどのよう

に利用されているかという詳細についてはまだ調査中ですが、好評をいただいているようです。



8月には「夏休みスペシャルおはなし会」として、博物館のシアタールームで怖い話を読むイベントも開催

—観光の支援にも力を入れていらっしゃるのですね。

はい。もともと当センター設立の目的として、村の産業の支援、とりわけ主力産業である観光の支援も掲げられていたのです。1日でも村での滞在日数を増やしてもらおうことを目指して、様々

な取り組みを考えています。

たとえば当センターの1Fは観光情報フロアとなっており、村の商工観光課の職員が「旅の案内人」として常駐しています。村内の観光スポットのうち気になるものを選んで自分だけの地図を作ることができる「フィールドナビ」や、利用者が自由に恩納村で撮った写真を投稿できる「キオクバンク」というページを当センターのホームページ上に設けています。投稿写真は1Fにある「キオクボード」からも閲覧できます。観光客の方にここで情報を集めていただき、それをもとに村内をさらに観光していただくことで、村での滞在時間を増やしてもらえるよう工夫しています。

—観光情報フロア・図書情報フロアにも、地域の情報を集め、最大限活かしていらっしゃる感じが印象的です。運営をされる中で、気づいたことはありますか。

地域に密着した情報の収集と提供を行ううち、インターネット上にはない細かい情報まで蓄積できるようになりました。例えば旧盆に村の各地で開催されるエイサーのスケジュール。地区ごとに



1F観光情報フロア



フィールドナビ
302ポイントの観光スポット情報が入っている。
情報は観光課職員により随時追加中。

異なる開催日時は基本的にその地域の人にしか知らされておらず、インターネットや本でも公開されていない情報です。しかし当センターの観光情報フロアには地域の細かな情報まで収集できる商工観光課のスタッフがいるため、複数地区のスケジュールを一覧にまとめて掲示することができました。これは、このセンターに来ないと見られない情報となっています。

他にも、地域の方と一緒に歩いてその地の歴史や伝承を聞きながらマップを作成するワークショップなども行っています。その時のマップも「キオクボード」として観光情報フロアで閲覧可能です。これもまた、ここでしか見られない情報と言えます。



キオクボード



キオクバンクに投稿された写真は定期的に館内に展示する

一地域に徹底的に密着されているからこそ、インターネットや市販の本には載っていないような、深い情報が手に入るというのは興味深いですね。今後の展望について聞かせてください。

まず、郷土資料の更なる収集と充実をはかりたいですね。これもまたここにしかない情報であり、観光客のためにも地元の方のためにもなる資料だと思っています。通常はフロアの隅にあることが多い郷土コーナーですが、当館ではあえて図書館フロアの中心の、しかも博物館への出入り口のそばに配置しています。

そして開館から5か月経った現在、色々な取り組みの甲斐あって、当面の目標であった「まずは多くの人に来てもらうこと」「施設に親しみを持ってもらうこと」は達成しつつあります。今後は次のステップとして、読書支援やレファレンス機能など、情報提供機能の役割

をいっそう強化していきたいですね。その中で、博物館と隣接しているという強みもさらに活かしていきたいです。

それから当センターのすべての活動において地域の魅力を積極的に発信していき、観光客だけでなく地元の方にも、地域の資源を再発見していただきたいと考えています。グリーンフラッシュのように、ここに住んでいると何気なく目にはできるものが、実は観光客が遠くから見に来るほど価値ある資源だった…ということもあります。当センターのイベント等をきっかけに、地域の方がそのことに気付いていただけると良いですね。図書情報フロアの窓際の席や3Fの展望台に座るだけでも、いつも見ている海の素晴らしさに改めて気づくことができるのではないかと思います。

一地域の資源を活かしたイベントや情報提供に徹底しておられる姿勢と企画力のすばらしさに驚かされました。本日はありがとうございました。

取材日：2015年8月27日



2F郷土資料コーナー

DATA

恩納村文化情報センター

所在地 | 恩納村字仲泊1656番地8 恩納村文化情報センター
TEL | (098) 982-5432
URL | <http://www.onna-culture.jp/>



図書館

04 INTERVIEW

弘前大学附属図書館

地域とともに、自由な知的交流を

話し手

三上 豊 | 弘前大学 研究推進部 学術情報課長

長谷川 友紀 | 弘前大学 研究推進部 学術情報課
情報サービスグループ 係長

聞き手

原田 亜美 | 金剛株式会社 社長室





アクティブ・ラーニング・エリア

一まず、図書館の特色について伺います。

弘前大学附属図書館は、大学がかかげるスローガン「世界に発信し、地域と共に創造する」を受けて、地域を意識した様々な取り組みをしてきました。

「敷居が高い」と思われがちな大学のイメージを、図書館を通じてやわらげられないかと考えています。

一スローガンの実現のために、図書館としても地域を意識されているということですね。具体的にはどのような取り組みをされていますか。

たとえば、自由に議論しながら机や椅子を動かして学修できるアクティブ・ラーニング・エリアは、予約不要で一般の方も使うことができます。ここで行われるイベントなどにも自由に参加可能です。現在は毎週水曜に、弘前大学の教職員や学生が講師になり、自分の研究内容や仕事内容を語るラウンジトークというイベントを開催しています。大学のことやその人の人柄、そして青森のことをもっと知ってもらう目的の企画ですが、一般の方も毎回数名参加されています。その他にも、飲み物の持ち込みが可能なオープンラウンジやオープンテラスなど、一般の方の利用可能なエリアは多いです。



オープンラウンジ



オープンテラス

また、当館は平成12年という割と早い時期から学外の方への図書貸出を行っています。さらに現在では、一般利用者を含む誰もが、個人文庫などごく一部のコーナーを除くすべての書庫に自由に出入りできます。以前は学



医学部分館と合計で83万7千冊の蔵書を有する弘前大学附属図書館(写真は本館外観)。旧館の老朽化に伴い、2014年10月にリニューアルオープンした。



部3年生以上の学生と大学職員しか入ることができない書庫がありました。が、昨年のリニューアルオープンを契機にその制限を廃止しました。公共図書館では見られないような古い資料や珍しい資料などもここにはありますので、



一般開放した書庫(上、下写真)



もっと多くの資料を自由に手に取ることができる面白さをぜひ体験してほしいですね。

また、書庫を開放するにあわせて、書庫内の図書の配架も、利用者の使いやすさを考慮したものに変更しました。これまでは図書と雑誌が同じ書庫内に置かれていましたが、図書のみの書庫と雑誌のみの書庫に分けました。

その他、地域へ『知』を還元するため、デジタル化した貴重資料をインターネット上で公開しています。中でも地元出身の作家・太宰治が高校時代に使っていたノートのデジタル版などは、内容の面白さがインターネット上で話題になり、図書館のウェブサイトのアクセス数が急増したこともありました。デジタル化資料の点数は毎年増やしていく予定です。

—2014年10月にリニューアルオープンされ、施設にも地域の特色を盛り込んだと聞いていますが。

はい。利用者に地域の歴史や伝統を知ってもらえることができるよう、館内の装飾に工夫をしています。1Fの閲覧コーナーの照明にはブナコを、閲覧機の仕切りの模様にはこぎん刺しを使い

ました。ブナコもこぎん刺しも弘前の伝統工芸です。館内全体のサイン等にもこぎん刺しの模様を施しています。リニューアルによって拡充されたアクティブ・ラーニング・エリアのガラス扉には、弘前の桜をイメージした衝突防止シールを貼りました。

—地域に根差し、地域に開かれた図書館を運営されているのですね。その中で何か苦労はありますか。

書庫開放に伴って配架を変更した際には、図書の大移動となり、非常に苦労しました。現在も一部調整中です。

また、イベントなどの際の広報活動にも苦戦しています。大学附属図書館というネームバリューでは、地域の方だけでなく学生たちに対しても広報効果が出にくいですね。

—今後の課題や展望などを教えてください。

更に多くの方に来ていただけるようにすることが課題です。そのためにも先述の広報について考えていかねばなりません。長期にわたる広報活動なども必要かと思えます。

また、すでに図書館を利用して下さっている地域の方に対しては、学生たち



緑色の背景にもこぎん刺しの模様が入っている

と一緒に学べるような機会も何か提供したいです。

そして、学部異なる学生同士、学生と地域の方など、多様な人同士が自由に知的交流できる「知の交錯する場所」にしていきたいと思います。

—大学図書館でありながら、学生だけでなく地域の方まで意識されている貴館のことで知り、非常に勉強になりました。今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。



ブナコを使った照明

取材日：2015年6月30日



閲覧機の仕切りにこぎん刺しが使われている

DATA 弘前大学附属図書館

所在地 〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
TEL 0172-39-3162 (または 0172-39-3155)
休館日 祝日・休日、夏季一斉休業期、年末年始、休業期間中の土・日曜日ほか
詳細は下記 URL をご参照下さい。
URL <http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/>



弘前大学では毎年地元のねぶた祭りに出陣している。大学職員だけでなく近隣の町会の人々も自由に参加するため、地域交流の一端を担っている。



05

INTERVIEW

和歌山大学附属図書館

『知恵の蔵』を担う人を育てる

話し手

渡部 幹雄 | 和歌山大学附属図書館 館長

聞き手

原田 亜美 | 金剛株式会社 社長室



2014年12月に新棟がオープンした和歌山大学附属図書館。そのリニューアルを牽引して来られた渡部館長にお話を伺いました。

—もともとは地方公務員として公共図書館にいらっしゃったそうですね。

はい。長崎県北高来郡森山町(現・諫早市)と滋賀県愛知郡愛知川町(現・愛荘町)で町立図書館の立ち上げに携わり、愛知川町立愛知川図書館の初代館長も務めました。どちらも立地条件は良いとは言えませんでした。そのような中でも地域の方々に大変喜んで使って頂ける図書館をつくることができました。こうした経験から私は、図書館は地域に合った“オーダーメイド”のものを作るべきだという信念を持っています。図書館はその地域の課題を解決することで、地域に貢献できる場であるべきです。過疎地域なら過疎地域に役に立つ設備や選書を用意する。それができれば、たとえ立地条件は悪くても必ず人は来てくれます。また、図書館づくりや運営をするにあたって国内外の図書館を数多く視察しました。その中で、やはり図書館こそが地域の繁栄を支える『知恵の蔵』だと確信しました。何か



和歌山大学附属図書館 館内



1F ラーニング・commons



1F カフェ

特色があって繁栄している地域には、必ず立派な図書館があったのです。

そのような考えを確立しながら愛荘町の教育長も務め終えたころ、和歌山大学附属図書館で図書館改革のプロジェクトがあるとのことで、山本前学長からお声掛け頂きました。そして2010年にこちらに赴任したのです。

一図書館は地域の課題を解決し、地域に貢献するべきとおっしゃっていましたが、大学図書館としては地域をどのように意識されているのですか。

やはり大学図書館としてできる一番の地域貢献は、人材を育ててその地へ



2F 開架図書エリア

輩出することだと捉えています。私自身は特に地域の『知恵の蔵』である図書館を支える人材の育成に注力すべきと考え、教授という立場で「地域図書館論」などの講義を担当しています。学生を実際に図書館に行かせて調査させ、改善提案をさせるなど、現場を重視した実践的な教育をしています。

一「人を育てる」ことを通して地域へ貢献することを意識されているのですね。2011年から取り組まれた和歌山大学附属図書館のリニューアルにも、その考えが表れているのでしょうか。

そうですね。和歌山県の地域特性に関する知識と、学際的な広い視野を合わせ持った人材を育てるために、図書館棟の中に紀州経済史文化史研究所、教養の森センター等も同じ建物内にあります。

図書館の内部も、学生にとって使いやすいよう整備し、新しい施設を「クロスカルセンター」と名付けました。「クロスカル」とは、「Cross(クロス)」と「Culture(カルチャー)」「Local(ローカル)」を掛け合わせた造語です。大学図書館を、教養・文化・国際・地域資源・



リニューアルによって開放的な空間になった2F閲覧席

人材などの『ローカル』・『カルチャー』が集い、『交流(クロス)』する場に、それによって新しい価値を創造できる場にするという考え方です。

一クロスカルセンターの概要について具体的に教えてください。

フロアごとに機能分担をし、利用の段階にあわせて回遊しながら階を上げていく構造になっています。1Fは「commons(共用空間)・出会いの広場」としてラーニング・commonsのスペースやカフェを設け、人が集いやすいフロアになっています。2Fは「教養の門・知識の交差点」として、調査相談や教養を深める場です。3Fは講座やアクティブ





3F マルチルーム 討論形式の授業の様子(上)／壁が一面ホワイトボードになっている(下)

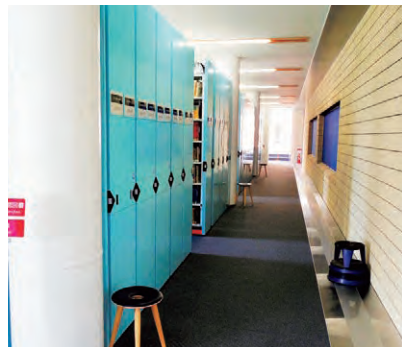


ラーニング、論文指導などを行う「企画・発信・交流」の場としています。4Fには教養の森センターが入っており、学際的な視野を育成する場としています。

それからリニューアル時には、学生に寄り添った目線で考えることを意識し、工夫しました。3Fにある教員の部屋はガラス張りにし、中がどうなっているかが外からも一目でわかるようにしています。中にいる教員と目が合えば、学生も入って来たり話しかけたりしやすいですね。ちなみにそれまで館長室だった部屋はマルチルームにし、壁一面をホワイトボードやスクリーンにしました。「学生を育てる」以前に、学生にとって使いやすい図書館でなければいけません。

ーリニューアルの中で苦労されたことはありますか。

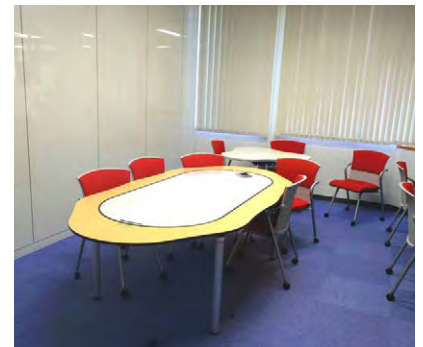
ゼロから作った公共図書館と違い、既にあるものを変えていく苦労がありました。私が来た当初の図書館は、箱に入れられた資料が山積みになって廊下にならされていたり、マイクロフィルムも劣化して酸の臭いが立ち込めていたりして、図書館というよりは本の倉庫、むしろそれ以下の状態でした。ゼロというよりむしろマイナスからのスタートでしたね。まずは学内の使われていなかった旧ボイラー室を改造して貰って、資料をそちらに緊急避難させました。マイク



3F 開架図書エリア

ロフィルムについても専門機関に問い合わせながら応急処置を施し、それからやっと設備の改善に取り掛かることができました。

最も大変だったのはやはり人に関する部分で、図書館職員の方々の意識を変えることでした。図書館は静かにして当たり前という考えがはびこっていたので、カフェを併設したり話しても良いラーニング・commonsを作ったりすることを理解してもらうには時間がかかりました。たしかに利用者に静かにしてもらうほうが、運営する側はリスクコントロールが少ないため、楽なのです。しかし、楽な仕事は機械にもできてしまいます。図書館職員のすべきことは人間力の要る仕事です。図書館はただ本を貸し出すところではなく、人々や地域の課題を解決し、人を育てる場でなければなりません。そのために、すべての情報をコーディネートし、噛み砕いて伝えることが図書館職員には求められるのです。こうした私の思いを、毎月全職員で行うミーティングの中で繰り返し話すことで伝えてきました。また、職員全員に担当のコーナーを割り振って役割を与えるなどの地道な取り組みによって、少しずつ新しい図書館観を理解して頂けるようになりました。

3F メディアルーム
ホワイトボード仕様の机が設置されている



4F 教養の森センター

一施設だけでなく、職員の意識についても改善に取り組んでこられたのですね。利用者の反応はいかがですか。

平成26年度の利用者は279,354人で、様々なリニューアルに取り組み始めた2011年4月時点からは約90,000人の増加となりました。また、今年の7月末には1日の利用者数が2,807人を記録したこともあり、約4,100人の和歌山大学の学生の約7割が図書館を利用したことになります。リニューアル前には1日の利用者が1,000人を超えることもほとんどなかったようですので、この数字は快挙と言えるのではないかと思います。新たに整備したラーニング・コモンズなどは、毎日ほぼ満席状態です。

それから図書館に関する講義を受講した学生のレポートに、「将来図書館で働きたい」という記述があったことも一つの成果だと感じています。

一学生が使いやすく、そして人が育つ場へと附属図書館が変わってきていることの表れですね。今後の課題や展望などはありますか。

「自分が図書館を作る」「自分が図書館をもっと良くする」といった使命感を持って、各地の図書館の現場で働く人をもっと育てていきたいですね。大学で図書館学を学んでも、結局は企業に就職する人が全国的には多いという現状があります。そうではなく、時代を切

り拓く意識とミッションを持って、自主的に地方の図書館へ行ってほしいと考えています。

和歌山県は過疎地域で、日本の課題を凝縮している地域です。そこに位置する和歌山大学だからこそ、地域、ひいては日本や世界の課題に目を向け、地域の『知恵の蔵』を支える人材を育てられると思います。

一ご自身も図書館の館長でありながら学生の教育に携わるなど、人を育てること、それを通して地域に貢献することに尽力されている姿勢に感動いたしました。本日は貴重なお時間を頂き、ありがとうございました。

取材日：2015年7月29日

DATA

和歌山大学附属図書館（クロスカルセンター）

所在地	和歌山県和歌山市栄谷 930
TEL	073-457-7905
休館日	試験期を除く日曜日、国民の祝日・休日ほか 詳細は下記 URL を参照してください。
URL	http://www.lib.wakayama-u.ac.jp/



06 INTERVIEW

東北大学附属図書館

100年の歴史を越えて、 世界と地域に向けたビジョンの体現

話し手 (写真左から)

芦原 ひろみ | 東北大学 附属図書館
情報サービス課 参考調査係長

村上 康子 | 東北大学 附属図書館
情報サービス課長

吉田 美弓 | 東北大学 附属図書館
情報サービス課 閲覧第一係

※所属・役職は取材当時のものです



聞き手

矢賀部 仁 | 金剛株式会社 社長室



今回は、2011年に創立100周年を迎えた東北大学附属図書館にお邪魔しました。2007年には東北大学としても創立百周年を迎えられたそうで、大学・附属図書館がそれぞれ100周年というメモリアルを経てどのように生まれ変わり、東北という地でどのような役割が期待されているのか教えていただきました。

—東北大学は2007年に創立100周年を迎えられたそうですね。近々、地下鉄の新しい路線ができて市街地とのアクセスも良くなると伺いました。

川内地区キャンパス計画は今年(2015年)12月の地下鉄東西線開通を意識して行われています。東西線が開業すると、仙台駅からのアクセスが格



2007年にオープンした
東北大学百周年記念会館 川内萩ホール



第3回国連防災世界会議(2015.3.14-18)の告知ポスター
川内萩ホールは総合フォーラム会場、隣接する国際センターは本体会議会場となった



国連防災世界会議にあわせて図書館で行った展示の様子



2012年10月に整備が完了した附属図書館の1Fメインフロア
正面入り口から館内に入ると
大規模なラーニング・コモンズが広がる

段に良くなります。2007年に大学敷地内に改修オープンした川内萩ホールの近くには仙台国際センターがあるので、両施設が一体で大規模な学会や国際シンポジウムを開催できるようになりました。さらに本学の周辺一帯は仙台北城址、仙台市博物館、宮城県美術館などが集中していますので、地下鉄が開通して中心街とのアクセスが良くなれば、東北全体の中でも文化・学術の拠点として、仙台市と本学が果たす役割が広がることになります。

—附属図書館本館は昨年(2014年)10月に1号館がリニューアルオープンされたそうですが、リニューアルに至る経緯をおしえていただけますか。

2009年にたちあがった「スペースワーキング」の検討がそもそもの始まりでした。施設の老朽化、書庫の狭隘化が進む図書館のスペースをいかに有効活用するかという検討会です。最大の



課題は、すでに飽和状態となっていた地下書庫の蔵書の再配置と利用者スペースの見直しでした。当初、図書館創立100周年にあたる2011年を目標としていましたが、東日本大震災の影響で計画の中断を余儀なくされました。その後、震災からの復旧工事等が行われ、1Fメインフロアのラーニング・コモンズ整備や地下書庫の完全電動集密化を経て、2014年には2Fのグローバルフロアの整備も完了しました。この間





2014年10月に整備が完了したグローバルフロア
英語多読リーダーズ、留学情報資料など資料面での充実はもちろん、
留学生支援イベントの開催など、グローバル人材育成の重要な拠点となっている



グローバル学習室における留学生コンシェルジュによる
「グローバルセッション」イベント風景と展示



にアクティブラーニングに対する文部科学省の方針が打ち出されたり、大学全体でグローバル化の流れが加速したりといったことがあり、大きな流れに乗って整備計画を進めることができました。

ーグローバルフロアは広くて明るく、とても目を引くスペースですね。グローバルフロアの整備に至った背景と具体的な活動について、少し詳しく教えてくださいいただけますか？

東北大学は2010年に「Global30」という文部科学省事業に採択され、国際人材の育成に積極的に取り組んできました。2013年には里見総長による「里見ビジョン」が全学的観点から策定され、2014年には「東北大学グローバルビジョン」が打ち出されました。「グローバル人材の育成」はこれらの流れの中で一貫して大きく取り上げられているテーマです。

図書館としてもこれらの事業の一環としてグローバルフロアを整備しました。留学生のケアは主に教育・学生支援部の業務ですが、このフロアでは、図書館として行うべきグローバルラーニング支援を行っております。授業などでグローバル人材育成に力を入れている大学はたくさんありますが、当館は留学生課や国際交流課といった関係部署や教員との連携を図りながら進めています。グローバルフロアのグローバル学習室はイベント時、最大120名の収容が可能です。実施するイベントや授業の規模によっては、中央部に設置可能なパーティションで部屋を半分に仕切るなど柔軟な運用が可能です。

具体的な活動としては、留学を希望する学生向けの事前研修会や、全学教育の授業の他、グローバル人材育成に関係した様々なイベントを催しています。昨年度は毎週木曜日に海外で働いている日本人ビジネスマンを迎えて自身

の経歴を語っていただくという学内団体のセミナーも行っていました。月～金曜の午後は日本語・英語のほかにインドネシア語や中国語、韓国語などを母国語とする留学生に「留学生コンシェルジュ」として日替わりで勤務していただいています。彼らには日本人学生、留学生の語学学習のサポートや図書館の案内などをしていただいています。

学内でもグローバルフロアの注目度はかなり高いようで、学生さん同士のハッカソン※で使いたいというご要望や、就職の模擬面接で使いたいといったようなご要望を頂いたこともあります。残念ながらこのフロアの利用はグローバル人材育成という趣旨に合うものにしていきますので、それ以外のご要望については多目的室やメインフロアなど館内の別のスペースをご案内するようにしています。グローバルフロアができたことでさらに図書館全体の施設利用が増えているようです。

※ハッカソン：同じテーマに興味を持った開発者が集まり、協議・協力しながら短時間でアイデアをぶつけ合い、成果を競い合う開発イベント

—その他、附属図書館としては、ビジョンに沿ってどういったことに取り組んでいらっしゃいますか？

図書館では所蔵資料を最大限活用して社会や地域に知を還元することを掲げていますので、定期的に所蔵資料(主に貴重書)を公開するための展示会や講演会を開催しています。当館は代表的なコレクションとして、夏目漱石の旧蔵書約3,000点からなる『漱石文庫』を所蔵しています。これらは漱石研究において大変貴重な資料であり、東北大学では貴重書として保存してあります。ご遺族の中では譲り渡し先として他の図書館も候補にあがったそうですが、他の図書館では分類ごとに配架されて館内で散逸してしまうため、最終的に『文庫』として一括で扱うことができる当館が受け入れることになりました。当時『漱石文庫』の受け入れに尽力されたのが、漱石の愛弟子で当館の第4代館長であった小宮豊隆先生です。漱石自身は東北大学と直接の関わりは無いのですが、当館には漱石が敬愛してやまなかったケーベル先生の『ケーベル文庫』や、親友の狩野亨吉の『狩野文庫』があったので、『漱石文庫』が当館

に来ることは自然なことだったのかもしれませんが、漱石の門下生でもある土井晩翠、阿部次郎は東北大学で教鞭を執った方々です。偶然かもしれませんが、漱石と東北大学の間には幾重にも重なるご縁があります。

これまでは展示会の際に学外の施設をお借りすることもありましたが、今回のリニューアルでエントランス奥の多目的室の整備が完了したので、いろいろな展示会が容易にできるようになりました。今後ますますこれらの特殊資料コレクションを公開する地域貢献活動を展開していきたいと考えています。来年

(2016年)は夏目漱石の没後100周年にあたる年ですのでその展示を企画しているところです。

—地下鉄東西線の開業に伴い地元における大学への期待が高まるなか、ビジョンに沿った多様な取り組みを通じて図書館として独自の存在価値を打ち出していらっしゃることはとても意義深いと思います。

本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

取材日：2015年2月9日



2F学生閲覧室の一角
東北大学にゆかりの著者の資料が並ぶゆかりコレクション

DATA 東北大学附属図書館(本館)

所在地	宮城県仙台市青葉区川内 27-1
TEL	022-795-5943(メインカウンター)
開館時間	月～金：午前8時から午後10時 土・日・休日：午前10時[午前8時]から午後10時 (※[]内は試験期間中)
休館日	年末年始(詳しくはホームページにてご確認ください)
URL	http://www.library.tohoku.ac.jp/





07

INTERVIEW

神奈川学園中学校・高等学校

受け継がれる “社会の中の誰かのために力になる”精神

話し手

- 湊谷 利男 | 神奈川学園中学校・高等学校 校長
- 松井 淨 | 神奈川学園中学校・高等学校 理事
- 唐澤 智之 | 神奈川学園中学校・高等学校 司書教諭
- 西村 賢子 | 神奈川学園中学校・高等学校 司書

聞き手

- 永沼 麻子 | 金剛株式会社 社長室



松井理事

湊谷校長

唐澤先生

西村先生





傾斜スライド棚

一神奈川県内屈指の伝統校である貴校ですが、昨年（2014年）創立100周年を迎えられたそうですね。

はい。創立100周年プロジェクトとして100年史の作成、講演会、式典など行いました。また記念建築の一つとして新図書館を建設しました。

以前は校舎の一角にあったのですが、新図書館は複数ある校舎の中心に位置します。図書館は学習行事や自学自習でも使用しますし、教育を支援する拠点でもあります。中学・高校どの校舎にいる生徒でもアクセスしやすい場所に建設しました。

新設にあたり館内の家具を一新しましたが、書架には防災を意識し、「傾斜スライド棚」を採用しました。揺れを感じて棚板が傾斜し、書物の落下を抑える機能を備えた棚です。

本校は女子校ですので、身長の高い生徒も少なくありません。落下物に

対してはより注意する必要があります。傾斜スライド棚の導入により、棚本体も大きく揺れる様な地震の際でも棚板が傾斜するので、書物が落下する心配がなくなりました。

一家具を一新するにあたり、防災を意識されたのには理由があったのでしょうか。

理由は本校の歴史にあります。本校は現在の校地で二つの震災を経験しました。一つは2011年の東日本大震災、もう一つは1923年の関東大震災です。

関東大震災の教訓もあり、以前から防災を意識して毛布や食料の備蓄をしていました。東日本大震災以降は、より万全を期するために家具や備品の整備など学校をあげて防災に取り組んでいます。

一貴校の歴史的背景から、防災への意識が以前より高かったという訳ですね。関東大震災での被害はいかがだったのでしょうか。

本校は「土丹」と呼ばれる固い地層の上に建っています。そのお陰で、横浜一帯が火災や建物の倒壊で壊滅的な状況の中、本校の木造校舎は一棟も倒れませんでした。そのため宮内省救療班本部に校舎を貸し、避難所として被災者救護の拠点となりました。

また当時の生徒は横浜市役所の委託で、被災者に支給する蒲団1万2000枚をわずか20日間で手縫い製作しました。



半年間校内に設けられた宮内省救療班





震災見舞品の蒲団製作模様



この社会奉仕活動は現在でも伝説の様に生徒たちに伝えられています。そして、東日本大震災を経験し、その伝説と自分たちを重ね合わせ、“自分たちに何ができるか、何をしようとするのか”を自然と考える様になりました。

また生徒たちにとっては、自分自身と向き合う機会にもなりました。まずは「今の生活をしっかりと送ること」「日頃から災害に対する心構えや備えをきちんとしておくこと」そして「限られた中でも何ができるかを考え、実践しようとする事」が大切だと学びました。

現在は「被災地の事を忘れず学び、考えつづけ、被災地のために出来る事をする」を大事に、生徒主体で活動を行っています。

例えば文化祭の売上げの寄付、幼稚園への手作りおもちゃの贈呈、現地からの要望に応え、小学校への図書の寄付などです。図書は寄付するだけでなく、おすすめのコメントを書いた

ポップと一緒に贈っています。

—先輩方の社会奉仕精神が今でも受け継がれているという事です—

はい。昨年度の創立 100 周年記念式典で生徒会が発表した「私たちが受け継いでいきたいこと」の一つが“社会の中の誰かのために力になること”でした。

一昨年からは被災地となった南三陸町を訪問し、ボランティア活動を行っています。今年には約100名が参加しました。

そこで得た情報や体験はクラスや各委員会で伝えられ、多くの生徒の中で共有されています。



「ビーチクリーン」ボランティア



—以前より備蓄をされていたとの事でしたが、東日本大震災ではいかがでしたか。

その日は試験の最終日で、校内には部活の生徒が約 200 名いました。またPTAの講演会があったため保護者と教員、そして避難してきた卒業生を合わせ、約 300 名が一夜を明かしました。



震災当日 教室内で休む生徒たち

震災の数年前より「大規模災害が発生した場合は、どうにかして生徒を自宅に帰す」という方針から「安全が確認されるまで学校に泊める」という方針に 180 度変更し、準備を進めていました。

幸い当日は電気・水道が使えました



防災毛布は900枚あった

ので大きな混乱はなく、備蓄で炊き出しを行い、夜も宿泊者全員が毛布で休む事ができました。

保護者との連絡もメーリングリストが出来上がっていたので、生徒の無事をメールとホームページにて数回発信しました。保護者の方々にも安心して頂く事ができ、後日感謝の言葉を頂きました。

また、電源を入れないという規則のもと、生徒にも携帯電話の所持を認めていたので、保護者と直接連絡を取る事ができました。学校としてもできる限りの対応ができたと思います。

今回の震災では学校と生徒・保護者間での情報の共有の大切さを痛感しました。

一貴校ではどのような防災訓練を行っているのでしょうか。

授業中に地震が発生したという設定で訓練を行います。各々がいる場所からホームルームの教室へ戻るとい流れです。実際に備蓄倉庫まで行き、手順も確認します。この通常避難訓練とは別に、登下校中に大規模地震が発生した時のシミュレーション訓練も行っています。

本校は堅牢な地盤にあり、海拔も19.4mと高所にある事から、登下校中の災害時には学校に向かうことを基本としています。そのため、行政が発行



行政が発行している浸水予想マップ

している横浜の震度予想マップや浸水予想マップを見ながら、実際の地形を思い浮かべてどの場所が安全かをシミュレーションします。

また、海拔の記載されている地図に駅から学校までの自分のルートを記入し確認しています。



駅から学校までの安全なルートを記入

一東日本大震災を受け、今後の貴校の展望を教えてください。

東日本大震災当時は全校生徒の3食分の備蓄がありました。現在は5食分です。全校生徒1200人を3日間に渡って守りきれぬ様、食糧だけではなく、発電機や毛布・寝袋など一層の装備

拡充を図っています。

また、横浜市から災害時に施設の一部を避難所として開放する様、要請を受けています。生徒のエリアと区別できる体育館や講堂を開放する方針で話を進めています。

一方生徒も、文化祭など校外の人が集まる行事の際の避難マニュアルを作成すべく、生徒会を中心に準備を進めている所です。

被災地訪問やボランティア活動も継続していきます。

これからも“身近な人だけではなく、目に見えない社会の誰かのために力になれる人”の育成を目指していきたいと思っています。

一貴校の歴史、そこに脈々と受け継がれている社会奉仕精神や防災への取り組みは興味深く、参考になりました。貴重なお話をありがとうございました。

取材日：2015年6月16日

DATA 神奈川学園中学校・高等学校

所在地 | 神奈川県横浜市神奈川区沢渡 18
TEL | 045-311-2961(代)
FAX | 045-311-2474
URL | www.kanagawa-kgs.ac.jp



文化観光施設

08 INTERVIEW

さかい利晶の杜 ～堺市立歴史文化にぎわいプラザ～

サカイからセカイへ 地域とともに盛り上げるまちづくりの拠点

話し手

秋田 昌紀 | 堺市 文化観光局 観光部 観光企画課 主査

川嶋 博之 | (株)トータルメディア開発研究所 チームリーダー

辻 瑠美 | 堺市立歴史文化にぎわいプラザ 運営グループ

聞き手

永沼 麻子 | 金剛株式会社 社長室





中へ入ると堺の歴史文化を紹介するとともに市内の観光情報を提供する“観光案内展示室”がある

—平成27年(2015年)3月にオープンとの事ですが、オープンに至るまでの経緯をお聞かせください。

堺市は仁徳天皇陵古墳を始めとする古墳や由緒ある神社仏閣、歴史あるまちなみが多く点在します。これまではそれぞれが独立していて、堺市の見どころを総括的に広く発信する様な施設がありませんでした。

そこで、堺市に来たらまず立ち寄れるような基点となる施設を整備しようというのが発端でした。

そして堺市の生んだ偉人であり、一般に広く知られている千家茶道の始祖・千利休と歌人・与謝野晶子をテーマとした文化施設と、市内の歴史文化を紹介する観光案内施設、そこに飲食店や観光バスも停められる駐車場を整備して、地域経済の活性化とまちの賑わいの創出を図る目的でオープンしました。

—「与謝野晶子記念館」と「千利休茶の湯館」はどのようにして作られたのでしょうか。

「与謝野晶子記念館」は、堺市駅前にあった「与謝野晶子文芸館」と「堺

市博物館」の学芸員が合同で取り組みました。晶子の愛用品などの関連資料の展示のほかに、旅好きで日本全国の殆どの県を訪れた晶子夫妻のエピソードやゆかりの場所について、タッチパネル形式で分かりやすく展示しています。



地図をタッチすると晶子ゆかりの地についての説明が表示される

また、晶子が堺に生きていたという証を表現する工夫として、晶子が生ま

れた明治11年から東京へ移る22歳まで住んでいた「駿河屋」(和菓子商)という生家の一部を再現し、晶子の少女時代の雰囲気を経験することができる空間となっています。



生家の駿河屋は2階が西洋づくりで大きな時計のある和洋折衷の建物であった

「千利休茶の湯館」については、1615年の大坂夏の陣や第二次世界大戦の空襲により利休の時代の物やゆかりの地がほぼ焼失しており、展示できる現物が少ないという問題がありました。

利休の茶の湯の世界をどのように表現していくか試行錯誤した結果、利休の壮年期の茶室(床部分)と、わび茶を完成させた晩年の茶室(床部分)を比較できる展示を軸にする事になりました。

また、堺市出身の片岡愛之助さんに千利休の声を演じて頂き、利休が自身の生涯や取り巻く人々について紹介するコーナーやシアターを設け、時代背景や茶の湯の世界の流れが分かるようになっています。



豊臣秀吉とつながりの深かった千利休が、その秀吉により命が絶たれる経緯などを語る



最初は展示できるような現物が少ないという事が問題でしたが、逆に茶の湯の知識がない方にも分かりやすい展示になったと思います。

一茶の湯を体験できる施設もあるので
すね。

はい。表千家・裏千家・武者小路千家の方々に協力を頂いています。

三千家家元命名の茶室が並ぶのは全国でもここだけで、三千家の先生の指導のもと、本格的な茶室でお茶を点てる体験や、三千家のお点前によりイス席で抹茶とお菓子を味わっていただく事ができます。



本格的な茶室（西江軒、風露軒、得知軒、無一庵）

この茶の湯体験を目的としたお客様も多く、お茶を召し上がりつつ、利休をのんで頂く時間を楽しんでいただけているのではないかと思います。



本格的な茶室でのお点前体験



立礼茶席（南海庵）ではイス席で抹茶とお菓子を楽しむ事ができる

—これらの施設の他にも楽しめるイベントを多く開催されていますね。

堺のまちづくりや、市内外に堺やさかい利晶の杜について情報発信をしたいという意欲の高いボランティアを公募で集めた“堺まち物語協議会”という市民グループがあります。現在10名で月に1回集まり、イベント計画や施設発展のための話し合いを行っています。

この夏は納涼茶会とスイーツ巡りスタンプラリーを開催しました。スタンプラリーは堺市内の和洋菓子店と提携し、参加者にチケットを購入して頂いて、そのチケットでまち歩きをしながらスイーツを楽しんで頂くというものです。近隣の方を始め、多くの方が参加くださいました。

この“堺まち物語協議会”の活動は、



市民の皆さんの自発的行動を可能な限り尊重しています。このような市民活動が受け入れられる場や体制を整え、イベントに限らず多くの方が気軽に参加しやすいワークショップを行ったりして、盛り上がり方が市民の間にも広がっていく事を期待しています。

たとえ協議会のメンバーでなくても、イベントやワークショップに参加して頂き、堺のまちの魅力に気づいて頂く機会になれば、と思います。

—今後の展望についてお聞かせください。

堺市内には、千利休や与謝野晶子に関連する名所やゆかりの場所があります。展示を見ただけで終わるのではなく、その後に徒歩や自転車、観光周遊バス等でまち巡りをして頂けるようなしかけやプログラムづくりをしていきた



夏に行われた納涼茶会の様子



路を挟んだ向かい側には利休が愛用したという椿井が残る千利休屋敷跡がある



施設内には利休や晶子に関する書物を閲覧できる図書情報コーナーがある



と思います。

また、このさかい利晶の杜は博物館の要素・体験施設の要素・観光施設の要素が一つにまとまっている文化観光施設です。そして、生きた時代が異なる千利休と与謝野晶子をテーマとしています。

この一見、違うものに見える複合的な要素が集まっている事に意味があるのではないかと思います。

この施設を訪れた市内外の方々が、

観覧や体験を通して利休・晶子に見られるモノづくりのDNAや古いものを大切にしつつ常に新しいものを取り入れていく堺人の気質に触れ、この気質が現代まで脈々と続いている事にも気付いてもらえる様な、特色のある堺の歴史と文化の魅力を体験できるまちづくりの拠点・発信地となる事を目標としています。

オープンして半年。来館者数は26万人を突破しました。当初の予想の年間20万人をはるかに超える勢いです。こ

の勢いが一過性のものではなく継続できる様、まずは全国の方にさかい利晶の杜を知って頂きたいと思います。

お茶や和歌は海外の方も興味のある分野だと思いますので、将来的にはサカイからセカイへ日本の文化を発信していけるといいですね。

—本日はありがとうございました。

取材日：2015年9月8日



(堺市博物館蔵)

千利休 (せんのりきゅう) 1522-1591

戦国時代から安土桃山時代にかけての商人・茶人。堺の商家の生まれ。家業は納屋(倉庫業)でした。わび茶(草庵の茶)の完成者として知られ、茶聖とも称せられます。豊臣秀吉の側近という一面もあり、秀吉が旧主・織田信長から継承した茶の湯を政治的に利用した政策の中で、多くの大名にも影響力をもちました。



(文化学院蔵)

与謝野 晶子 (よさのあきこ) 1878-1942

歌人で古典研究、評論、教育の分野でも活躍。現在の堺市堺区甲斐町にあった、和菓子商「駿河屋」の三女として生まれました。代表作に歌集「みだれ髪」や詩「君死にたまふことなかれ」があります。23歳で夫・与謝野寛(鉄幹)と結婚後、12人の子どもの母となり、子育てをしながら作品を発表し続けました。

DATA

さかい利晶の杜 ～堺市立歴史文化にぎわいプラザ～

所在地 〒590-0958 大阪府堺市堺区宿院町西2丁1-1

TEL 072-260-4386

FAX 072-260-4725

URL <http://www.sakai-rishonomori.com>

休館日 ■千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始

■観光案内展示室 年末年始 ■駐車場 年中無休

開館時間 ■千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時(最終入館 午後5時30分)

■茶の湯体験施設 午前10時～午後5時(最終入席 午後4時45分) ■駐車場 24時間





美術館

09

INTERVIEW

つなぎ美術館

町の「窓」としてのアートプロジェクト —地域資源を再評価するために

話し手



楠本 智郎 | つなぎ美術館 学芸員

熊本県南部の葦北郡にある津奈木町は、海と山に囲まれた人口約5,000人の小さな町です。町立の美術館であるつなぎ美術館は現在、住民参画型ア

ートプロジェクトを実施していることで県内外から注目されています。今回はつなぎ美術館のただ一人の学芸員、楠本様にお話を伺いました。

聞き手

原田 亜美 | 金剛株式会社 社長室



海の上に浮かぶ学校として知られる、旧津奈木町立赤崎小学校アートプロジェクトの舞台にもなっている



つなぎ美術館 外観

最初に、つなぎ美術館の概要と、楠本様のプロフィールについて教えてください。

津奈木町では、1984年から「緑と彫刻のある町づくり」という、芸術文化による町づくりを実施しており、屋外彫刻の設置などを行ってきました。つなぎ美術館はそのシンボルとして、



「緑と彫刻のあるまちづくり」の一環で町に設置された屋外彫刻

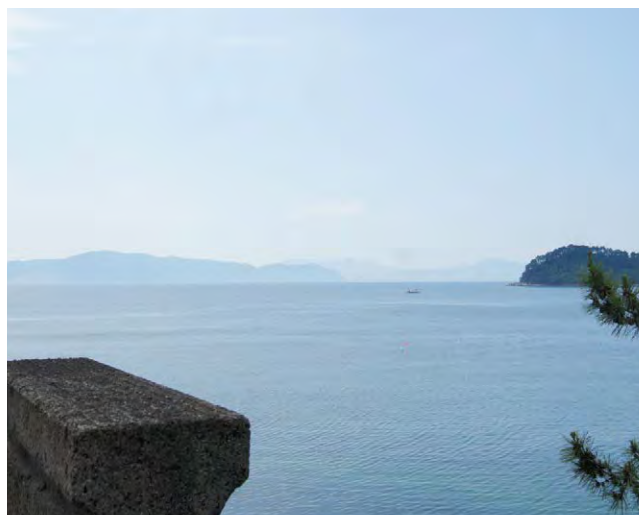


2001年の4月に開館しました。熊本県にゆかりのある作家の絵画や彫刻作品を中心にコレクションしています。美

術館の学芸員は私一人です。館内の受付や喫茶店運営、裏山へのモノレールの運行等はすべて地元の婦人会に



旧津奈木町立赤崎小学校



校舎の裏には海が広がる



運営を委託しています。

つなぎ美術館は、住民参画型のアートプロジェクトを行っていることで非常に注目されていますね。プロジェクトの具体的な内容について教えてください。

住民参画型アートプロジェクトは、2008年から美術館の社会教育事業として開始しました。館が招聘するアーティストと、地域の住民で構成される実行委員会とが一緒になってワーク

ショップやイベントの企画をし、1年かけてプロジェクトを作り上げていきます。プロジェクトにもよりますが、住民のアイデアがほぼそのまま採用されることもあります。

現在は「赤崎水曜日郵便局」という、映画監督の遠山昇司さん、アーティストの五十嵐靖晃さん、玉井夕海さん、加藤笑平さんを招いたプロジェクトを実施しています。海の上の学校として知られる旧赤崎小学校を舞台に、海から届いたメッセージボトルを交換する様子をイメージした企画です。閉校になっ

てしまった赤崎小学校に郵便受を設置して郵便局とし、そこへ宛てて「水曜日の出来事」をしたためた手紙を送ると、知らない誰かの「水曜日の出来事」の手紙が返ってくるというものです。津奈木町の住民も手紙の転送作業や、記念イベントの企画などに参加しています。去年の10月まで放送していたラジオでは住民の方が手紙の朗読も行っていました。皆さん積極的に携わってくださっています。

この「赤崎水曜日郵便局」は2014年度にグッドデザイン賞を頂きました。



つなぎ美術館 館内





実行委員の会議の様子

また、合計6回のアートプロジェクトを積み重ねてきた取り組みを認めて頂き、「平成25年度地域創造大賞（総務大臣賞）」を頂くこともできました。

—こうしたアートプロジェクトを始めたきっかけや目的は何だったのですか。

つなぎ美術館が開館して2~3年目に来館者アンケートを取ったところ、町民の利用が2、3割ほどしかありませんでした。過疎地で高齢者が多い津奈木町では、美術館が皆さんの日常に馴染みづらかったのです。そこで、美術や芸術に町の方が親しみを持っていただけるよう、アートプロジェクトの実施を考えました。この時、館が一方的にあつらえた企画では興味を示してくれないだろうと踏んで、企画の段階から住民と一緒に作り上げる住民参加型のプロジェクトにしました。

—実行委員のメンバーは住民の方で構成されていると伺いましたが、どのようにして人を集めたのですか。

町で活動中の諸団体に所属している人の中から、実行委員に入ってもらいたい方をさがして直接声を掛けました。もち

ろん最初から抵抗なく受け入れて頂いていたわけではなく、皆さんの理解を得るまでには時間も必要でした。最初は声をかけても「アートはわからないから…」と言われてしまうこともありましたが、あえてそのような方を中心に実行委員へ入っていただきました。もともと美術や芸術に興味のある人ばかりが実行委員になってしまったら、そうでない人が話についていけなくなり、結局は参加しづらくなってしまったと考えたためです。そして、実際にプロジェクトに参加してみて頂いて「いままで全く興味もなかったけど、やってみると面白かった」と思ってもらえれば、その人が知人や友人に話を広めてくださいます。もともと美術の分野にいる私のような人間がプロジェクトを「面白いよ」と薦めるよりも、普段町の中で付き合いのある人、しかもこれまでは美術館



プロジェクト活動の様子



に行ったこともないような人がなぜか面白がっている様子を見る方が、町の皆さんも興味をもって下さいます。「あの人がそこまで言うならやってみようか」と、参加して下さる方も増えていきました。

一人から人へと広まっていったのですね。プロジェクトの活動をしていくうえで、意識していることはありますか。

「芸術性」と「地域性」と「話題性」の3つのバランスが取れた活動にすることです。

まず「芸術性」のないプロジェクトなら、美術館が実施する意味がなくなります。とはいえ、「芸術性」ばかり追求してしまっても町の人が興味を持ってくれませんし、この津奈木町でプロジェクトを行う意義もなくなります。そこで、「地域の資源を利用する」ことをプロジェクトのルールとし、「地域性」を持たせています。地域の資源を再評価し、その結果住民の皆さんに地元への愛着を深めてもらうことも狙っています。この町の方々は以前、よく「この町には何もない」とおっしゃっていました。しかし、プロジェクトを機に外から来たアーティストたちから見れば、とても魅力的に感じる部分がたくさんあるので、毎年プロジェクトをするたびに、町の新しい魅力に気づかされています。プロジェクト終了後にも、アーティストが家族や知人を連れてプライベートで遊びにきてくれることもよくあります。こうした体験を繰り返せば、住民の皆

さんも「何もないと思っていたけど、外から来る人はこんなに喜んでくれている」と、郷土に対する誇りを高めることができるのではないかと思います。そしてプロジェクトの情報を外へ発信し、メディア等で取り上げていただける「話題性」。町の活動が外部で評価されると、住民の皆さんのモチベーションにつながります。

さらに最近ではその3点に加えて、「娯楽性」も重要だと気がきました。アーティストが町に来ると、住民の皆さんが自宅に泊めようとしたり、自宅でバーベキューをしようと張り切って準備してくれたりする光景が見られます。また、ワークショップ等の後に行うお茶会も大変盛り上がります。アートプロジェクトの活動外での関わりもまた、皆さんの楽しみになっているようです。プロジェクト継続のためには、こうした楽しみも重要かと思います。

一次回以降の課題などはありますか。

地域の経験値をもっと高めることだと思います。私は、アートプロジェクトはこの津奈木町の『窓』のようなものだと考えています。今はそこを通じて、外から色々な人が行き来している状態です。今度は津奈木町の住民の皆さんが自ら窓の外へ出て、経験を広げてほしい。去年東京で行われたグッドデザイン賞の授賞式には実行委員の住民の方3名に同行してもらいました。このように外の世界とつながる一つの契機としても、プロジェクトを活かして

ほしいですね。

—最後に、美術館が地域の関わりの中で果たすべき役割について、楠本様のお考えを聞かせて下さい。

地域の公立美術館は、その地域に住む人が美術を通して自分たちの暮らしと郷土を前向きにとらえ、「肯定」できるようにする役割も持っているとは私は考えています。それと同時に美術館は、美術の作り手や社会全体にも貢献していかなければいけません。地域のためだけの美術館になってもいけないし、作家のためだけの美術館になってもいけない。地域の公立美術館にはバランス感覚が求められるのではないのでしょうか。

—本日は、貴重なお話をありがとうございました。

取材日：2015年5月29日

つなぎ美術館のアートプロジェクト

2008

「津奈木ハートマン計画」

パフォーマンス作家・レインボー岡山さんを招聘。
ワークショップ「眼鏡橋レインボー大作戦!」では、県指定重要文化財の眼鏡橋から色とりどりの風船を投げて虹のアーチを制作。



2009

「TSUNAGI 光と風の回廊」

木彫家の上妻利弘さんを招聘。津奈木町の山の中の公園に、雑木で「森の家」などを制作。



2010

「大地のメモリア」

彫刻家の勝野眞言さんを招聘。津奈木町の土と籾殻を使って、未来の津奈木町を想像しながら住民とともに焼き物をつくり、展示。



2011

「赤崎海想日誌」

アーティスト 今田淳子さんを招聘。赤崎小学校内で様々なワークショップを開催。家庭の廃材や不用品で飛び出す絵本をつくり、即興で寸劇をする「アート de マルシェ」など。



2012

「TSUNAGI ハート!アート!パラダイス!」

グラフィックデザイナーの松永壮さんと舞踏家の森下真樹さんを招聘。また、熊本県立劇場とも連携。県立劇場から派遣されたダンサーが津奈木町の男性による「オヤジダンサーズ」を結成、ダンスを披露。松永さんと住民が制作した大漁旗を縫いあわせて舞台の装飾とした。



2013~

「赤崎水曜日郵便局」を3か年計画で実施中

2014~

アーティスト・イン・レジデンス実施中

町で増加する空き家に、美術館が呼んだアーティストが数か月間住み、滞在制作をしてもらう活動。



2015~2016
予定

アーティストの西野達さんを招聘予定。

DATA つなぎ美術館

所在地	〒869-5603 熊本県葦北郡津奈木町岩城 494
TEL	0966-61-2222
開館時間	10:00 ~ 17:00(入館は 16:30 まで)
休館日	水曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12月29日~1月3日)他
URL	http://portal.kumamoto-net.ne.jp/town_tsunagi/base/pub/default.asp?c_id=50&mst=0

編集後記

今回のPASSIONでは、「知を守り、地を育む」を全編通したテーマとしました。

知の拠点である図書館や文化施設の運営の中ですでに論じつくされているテーマであることは承知していたため、今更この主題を掲げるのもどうだろうかと当初は心配していました。しかし実際取材に行ってみると、皆様の地域に対する熱い想いを予想以上にお聞きすることができたため、結果的に良かったのではないかと今では感じています。

取材で伺ったお話を振り返ると、「地域の人に地域の魅力を再発見してほしい」「地域の人に地域を好きになってほしい」という言葉が多く出てきたように思います。そして、そうおっしゃる方々ご自身が地域のことをとても好きで、楽しんでいて、誇りに思っていらっしゃることが伝わってきて、取材していた私までわくわくしたことも印象に残っています。

このわくわく感が、冊子を読んで下さった皆様にも伝われば、これほど嬉しいことはありません。

もちろん、地域をどう意識してどのような取り組みを展開していくのかは施設や地域ごとに様々ですので、「こうあるべき」といった唯一の正解や結論を示すことはできないかと思えます。しかし、ありきたりな感想かもしれませんが、施設の運営に携わっている方々ご自身が地域を誰よりも好きでいるということだけは、どの地域や施設においても最も大事な要素だと言えるのではないかと感じました。

お忙しい中、素晴らしいお話を聞かせていただき、校正にまでご協力いただいた皆様には、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

また、大分県立美術館様、恩納村文化情報センター様におかれましては、ウェブ限定記事「Another PASSION」にも取り上げさせていただくために複数回にわたり訪問いたしました。毎回ご対応いただき、本当にありがとうございました。

余談ですが、青森から沖縄まで各地の取材に行かせていただいた今回の制作中、気温差にやられたのか、不覚にもマイコプラズマ肺炎に罹ってしまったこともありました…。皆様もご自愛ください。

平成27年11月
金剛株式会社 原田

安心と先進で社会文化に貢献する

